
【巻頭言】

運動疫学研究会の活動と今後の展望

荒尾 孝¹⁾

財団法人 明治生命厚生事業団体力医学研究所¹⁾

高齢社会を迎えたわが国においては、生活習慣病の予防や高齢者の健康維持といった慢性疾患や老化に対する予防対策が重要な健康問題であり、今後はこのような問題に対して、健康科学の積極的な貢献が求められます。わが国の健康科学を構成する重要な専門分野の学術機関として期待される日本体力医学会においても、Evidence Based Approachを重要視した Science としての発展がこれまで以上に望まれています。その意味で、健康の維持増進に対する運動や身体活動の有効性について、これまでの生理、生化学的な研究に加え、疫学研究により集団や地域さらには国家レベルでの"Evidence"を明らかにしていくことが求められます。

このような状況を踏まえ、平成10年9月に日本体力医学会会員の諸先生方の御賛同と御協力を得て、運動疫学研究会が発足されました。研究会設立2年目の本年度は、第1回の運営委員会と研究会総会が開催され、研究会役員人事や活動方針などが正式に決定されるなど研究会の運営体制と方向性が確立されました。そして、会員数が順調に増加するなか、昨年9月には第2回運動疫学研究集会在九州大学健康科学センターの熊谷秋三先生のお世話により、前回と同様に日本体力医学会の前日に開催されました。今回の研究集会は、学会開催地の熊本から遠くはなれた福岡で開催されましたが、熊谷先生をはじめ多くの先生方の御努力により、当初の予想を上回る多くの会員の方々の参加が得られました。研究集会では教育講演3題に続き、一般演題9題が発表されるなど、第1回研究集会上回る内容となりました。また、昨年は研究会の新しい活動として、運動疫学セミナーが開催されました。このセミナーの開催にあたっては、日本体力医学会と日本疫学会の後援を頂くとともに、日本疫学会会員の先生方に絶大なる御協力を頂きました。今後、このセミナーを通じて、より多くの日本体力医学会会員の先生方が疫学に関する理論と知識を修得され、体力科学の新たな研究分野を開拓・育成する人材として活躍されることを期待したいと思います。

疫学はかつての「状況証拠を提示する研究方法」から、今では「病因を発見し、病因効果を定量的に測定する科学的方法」という認識に変わってきました。その理由には、複数の要因が関与する現代の慢性疾患の要因解明に分析疫学的研究が大きく貢献したことがあげられます。そして、最近では疾患の遺伝要因の解明が注目されていますが、その検討の手法として疫学的研究方法が用いられるようになり、分子遺伝疫学という新しい研究分野として注目されています。健康科学においても、分子生物学的手法により遺伝要因をとらえ、環境要因との関連を疫学的手法により明らかにすることができれば、個々の遺伝要因を踏まえた健康づくりが可能となることも考えられます。健康科学を構成する体力科学においても、ミクロ的手法とマクロ的手法を融合させることにより、大きな発展が期待されます。その意味で、運動疫学研究会が今後ますます発展し、運動や身体活動に関する疫学研究の向上に寄与するとともに、学際的な研究活動の活性化にも貢献できることを期待したいと思います。